

## 英語色彩表現史の流れ

## A Historical Sketch of English Color Expressions

吉村 耕治 Koji Yoshimura 関西外国語大学短大部 Kansai Gaidai College

キーワード：基本色名、色彩表現、歴史、共感覚  
 Keywords: basic color terms, color expressions, history, synesthesia

## 1. はじめに

色彩には人間が現実生活を営む上で必要な情報が内包されている。そのため、言葉の世界では、いつの時代でも新しい色名が創造されている。現実の色彩を言語化した色彩表現の歴史は、その言語を使う人々の生活や社会の歴史、つまり、その文化の歴史でもある。実際の色に人間が与えた色名も含めて、色を言語化した表現は色彩表現と呼ばれている。英語の色彩表現の歴史には英語国民の文化が反映している。

## 2. 古英語期 (700-1100 年) —kenning の時代

社会史においては「黒、白、赤」の三色基軸の時代であるが、古英語詩は“a literature of light and dark, white and black”(N. F. Barley, p. 17)(明と暗、及び、白と黒の文学)と指摘されている。英語の色彩表現史では「黒と白」「明暗」の二色基軸の時代で、赤の重要性はまだ低い。しかし、古英語詩“The Nine Herbs Charm”(9つの薬草の呪い)には、毒の色を表すために9つの色彩語が用いられている：

1) wið ðy readan attre, wið ðy runlan attre,  
 wið ðy hwitan attre, wið ðy wedenan attre,  
 wið ðy geolwan attre, wið ðy grenan attre,  
 wið ðy wonnan attre, wið ðy wedenan attre,  
 wið ðy brunan attre, wið ðy basewan attre,

(‘The Nine Herbs Charm’, 47-51)

(against the red poison, the gray poison, the white poison, the blue poison, the yellow poison, the green poison, the black poison, the blue poison, the brown poison, the purple poison) (赤い毒、灰色の毒、白い毒、青い毒、黄色い毒、緑色の毒、黒い毒、青い毒、褐色の毒、紫の毒に対して [力がある。])

古英語期から用いられている色彩語には、*black*, *brown*, *gray*, *green*, *red*, *white*, *yellow* などの他に、朽葉色や淡黄褐色を表す *fallow*, 薄青色の *haw*, 霜のような白さを表す *hoar*, *red* と同様に赤色を表し、今では方言に残っている *rud* がある。複合色彩語には血のよ

うな赤色を表す *blood-red*, 萌黄色を表す *grass-green*, 鉄灰色の *iron-gray*, 乳白色の *milk-white*, 雪のような白さを表す *snow-white* がある。

## 3. 中英語期 (1100-1500 年) —allegory の時代

七色基軸に入る過渡期の時代。「黒、白、赤」の三色基軸を経て、基本色名の色には変化があるが、14世紀には五色基軸の時代に入ったと考えられる。

13世紀には、バラ色を表す *ruddy*, 黒色の *black* の名詞用法と自動詞用法、黒くなるの意の *blacken* の自動詞用法、白くなるの意の *whiten* の自動詞用法などが見られる。複合色彩語には、はしばみ色を表す *nut-brown*, 濃いバラ色の *rose-red* などが用いられており、「真っ黒」を表す“as black as a crow”や、「真っ赤になる」の意の“bycome red as bloode”(Floriss and Blanchflour, 622)のような比喩的色彩表現も見られる。古フランス語からは13世紀に *blue* と *pale* が借用されている。14世紀には *azure*, *bay*, *bice*, *blanch*, *bluish*, *murrey*, *sable*, *saffron*, *sanguine* など、多くの色彩語が借用されている。14世紀後半の Chaucer の *The Canterbury Tales* には、色彩と音の感覚が allegory (寓喩) の表現で用いられている箇所がある：

2) The crueel Ire, reed as any gleede;

The pykepurs, and eek the pale Drede;

(‘The Knight’s Tale’, 1997-98)

(燃える石炭のような赤い残忍な「怒り」、スリ、そして、青ざめた「恐怖」。)

寓喩 (諷喩) は遠まわしにさとす技法で、「凶悪」「怒り」「恐怖」などの抽象概念が擬人化されている。

水色を表す *water-color* (現代英語では「水彩画」の意) のように、物を表す名詞の後に *-color* を付けた固有色名の表現は、15世紀頃から見られる。

## 4. 近代英語期 (1500-1900 年) —metaphor の時代

観察と実験を重視する科学の時代になり、六色か七色基軸になる。Sir Issac Newton(1642-1727)が1666年にガラス・プリズムを通して太陽スペクトルが生じることを発見し、18世紀初頭に、色彩は連続体で区切りがないとするスペクトルに基づく色観念が現れる。

*chromatic* の初出年は1603年。*achromatic* が英語で初めて使われた年は1766年。*a* はラテン語の *ab*

(away from や from の意) の異形 *a* に由来する。

色彩語が人間論と関連している場合がある。例えば、J. Milton の 'Il Penseroso' (沈思の人) では：

3) Hail divinest Melancholy,  
Whose Sainly visage is too bright  
To hit the Sense of human sight;  
And therefore to our weaker view,  
Ore laid with black staid Wisdoms hue.

(Il Penseroso', 12-16)

(非常に神々しい「憂鬱」よ、その神聖な容貌はあまりに光り輝き、人の視覚を眩ませるので、私たちの弱い視力のために深い知恵の色、黒で顔を覆う。)

と語られる。憂鬱質の人の顔が黒色で表現されている。ルネサンスの頃には、感覚は人間の4つの体液(血液、黄胆汁、粘液、黒胆汁)とも関係があり、4つの体液の多少によって顔の色や形などの外的特徴が決まると考えられていた。多血質、胆汁質、粘液質、憂鬱質で、顔色は赤い顔、黄色い顔、白い顔、黒い顔であった。

16世紀以降には、2つの異なる色彩語を合成した複合色彩表現が多く造られている。例えば、*brown-bay*, *black*, *gold*, *green*, *pink*, *red*, *rosy* (1594年に初出例)や、*purple-black*, *blue*, *brown*, *crimson*, *green*, *pink*, *yellow* (1587年に初出例)がある。1510年頃の初出で、織物の原産地名の入った *Lincoln green* (リンカン・グリーン、黄緑色)もある。ルネサンスの頃までは、海緑色を表す *sea-green* (1594年に初出例)のような複合色彩表現の第一義は強調であり、第二義が識別である。17世紀からの借用色彩語には、銅の表面に生じる錆の緑青色を表す *aeruginous*、空の青色を表す *cerulean*、くり色を表す *chestnut* がある。

19世紀は英国の有機化学者 William Henry Parkin (1838-1907)によって合成染料 (synthetic dye) が発見された時代 (1856年)で、英語の色彩語彙の歴史において最も大量の色彩語が主にフランス語から借用され、最も色名の数が増した時代である。ラクダ色を表す *camel* や南欧の山地に生息するシャモアの毛皮色を表す *chamois* などのように動物の名前を転化した色名や、ラベンダー色の *lavender*、セイヨウスモモ色の *plum*、色鮮やかな花を付けるペチュニアの暗赤紫色を表す *petunia*、ザクロの実の色を表す *pomegranate*、ひなげし色の *ponceau*、サクラソウ色の *primrose* のように植物の名前を転化した色名、緑柱石の海緑色を表す *beryl* やトルコ石の青緑色を表す *turquoise* のように鉱物の名前を転化した色名などがある。

##### 5. 現代英語期 (1900年～現代) — 不合理の時代

色彩科学の進歩とともに色彩の伝達方法は、曖昧性を排除する方向に発達してきた。色彩の分類は恣意的なものであるとする相対主義的な考え方と、色彩の分類には普遍的な原型となるものがあるとする普遍主義

的な考え方が共存している。現代の色彩表現の特徴は、精密な記述法と簡略な記述法とがともに用いられて、豊かな色彩の世界を意識して、多様な色彩表現が駆使されていることである。現代では男女のセックス・カラーも混乱し、ボーダーレスの状態になっている。まさに不合理 (あるいは *chaos* 混沌) の時代に相応しい現象である。異質なものを融合させる試みが広く行われている時代で、“a harsh color” (どぎつい色) や “heavy colors” (強い色) のような共感覚色彩表現が、文学の世界だけではなく、一般的にも広く創り出されている。男と女、子供と大人の間だけではなく、様々のジャンルの間でボーダーレスが進行している。

##### 6. おわりに

色彩語の進化には7段階があるとする Berlin and Kay の説は、言語の普遍的特性であるだけではなく、英語色彩語彙の進化の過程においても適応できる。基本色彩語が2色から5色、7色に増加し、Old Norse (古北欧語：例えば *blo*) や Old French (古フランス語：例えば *asure*, *bay*, *blanche*, *blew*) などの借用色彩語が増えただけではない。古英語期には複合色彩語や *geblonden* を用いた混合色彩表現が見られるが、中英語期にはロマンス語系言語の影響から “between A and B” の構造の混合色彩表現や、古期北欧語の “i bland” の影響から “in bland” を含む混合色彩表現が用いられている。Chaucer には “lyk saffron” (*Sir Thopas*, 1920) (like saffron: deep yellow in color 濃い黄色) のような説明的色彩表現や寓喩色彩表現などが用いられているが、近代英語の時代には複合色彩表現が増加し、一層多様な色彩表現が用いられている。19世紀以降には共感覚色彩表現の頻度が増えつつある。

##### 参考文献

- Barley, Nigel F. (1974) “Old English colour classification: where do matters stand?” *Anglo-Saxon England* 3, ed. Peter Clemoes, Cambridge University Press, 15-28.
- Berlin, Brent and Paul Kay (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Biggam, C. P. (1997) *Blue in Old English: An Interdisciplinary Semantic Study*. Amsterdam-Atlanta, GA: Rodopi.
- 吉村耕治 (1994, 1995) 「OED (第2版) に現れた英語色彩語彙の歴史的変容 (上下)」関西外国語大学『研究論集』60号、61号、1-30, 9-32.
- 吉村耕治 (編著) (2004) 『英語の感覚と表現—共感覚表現の魅力に迫る』東京：三修社。